

# Human Rights

令和3年度

第40回 全国中学生  
人権作文コンテスト

## 横浜市大会 作文集

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方務局

横浜市教育委員会

# 第40回

全国中学生人権作文コンテスト

横浜市大会作文集

# はしがき

昭和二十三年（一九四八年）十二月十日に国際連合総会で世界人権宣言が採択されたことを記念して、毎年十二月四日から十日まで人権週間が設けられています。

これにあわせて、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会と横浜市教育委員会の共催で「全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会」を実施しています。

本コンテストは次代を担う中学生に、人権問題についての作文を書いてもらうことにより、人権尊重の重要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的としています。

本年度は、一二七校、五五、〇七九編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

コンテストに寄せられた応募作品はいずれも中学生らしいみずみずしい感性に富み、人権問題につい

て、自ら真剣に考えて意見を述べたものばかりで、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。

この作文集は、校内審査を経た六二四編から、一次審査で六二二編、二次審査で五十編を選考し、さらに最終審査で最優秀賞、優秀賞に選ばれた二五編を収録したものです。より多くの方々にお読みいただき、身近な生活の中で人権尊重の輪が広がることを願ってやみません。

終わりに、コンテストの実施にあたり多大な御尽力をいただきました、審査に関わられた先生及び多くの関係者の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

令和三年（二〇二一年）十一月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

（横浜市・横浜人権擁護委員協議会・  
横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局）

横浜市教育委員会

## 【審査講評】

第四十回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、市内一二七校から五五、〇七九編の作品を御応募いただき、ありがとうございました。また、参加された各校の先生方におかれましては、熱心に御指導いただき、また審査にあたられましたことに厚く御礼申し上げます。

日ごろの自らの体験を通じて感じたこと、考えたことを人権の視点から見つめ直し、一つの作品としてまとめ上げた中学生の皆さんの意欲と努力に心から敬意を表します。

作品の多くは、家族や友人、地域の人との日常のふれあいを通じての、ふとした気づきや心の動きを素直に表現しており、その感覚の鋭さに、はっとさせられる作品もありました。

中学生の皆さんが人権作文を書くことで培った「人権の視点」を、これからも永く持ち続けてくださることを願っております。

横浜市大会においては、校内審査を経た作品について、市立中学校国語研究会の先生方による一次

審査、教育委員会事務局指導主事による二次審査を行い、最終審査で最優秀賞など各賞を決定いたしました。最優秀賞のうち、「ぼくの夢見る未来」「同情ではなく共感を、そして協力を。」「自分とは違う自分」「体と心の支え」「『性別』という枠」「幸せかどうかは自分で決める」「誰もが理解し合える社会とは」「自分らしさは宝物」を神奈川県大会の優秀賞として推薦いたしましたことを御報告申し上げます。

審査員の皆様には、御多忙の中、審査に御協力いただきましたことに改めて御礼申し上げます。

最後に、この作文集が、中学生のみならず、広く市民の皆様が人権について考えるきっかけとなれば幸いです。

審査委員長 小林 千恵子

(横浜人権擁護委員協議会会長)

# 目次

はしがき

審査講評

入選者紹介

## 最優秀賞

### ●横浜市長賞

ぼくの夢見る未来

横浜市立保土ヶ谷中学校

三年

太田 圭胡

7

### ●横浜市教育長賞

同情ではなく共感を、そして協力を。  
自分とは違う自分

横浜市立南高等学校附属中学校  
横浜市立六ツ川中学校

三年

霧生 帆南  
小野寺 航

13 10

### ●横浜人権擁護委員協議会長賞

体と心の支え  
「性別」という枠

横浜市立釜利谷中学校  
横浜市立領家中学校

二年

長谷川 廉  
中川 優実

16 18

●横浜市人権擁護委員会長賞

幸せかどうかは自分で決める  
誰もが理解し合える社会とは  
自分らしさは宝物

横浜市立上飯田中学校	一年	平田 裕音	21
横浜市立本宿中学校	三年	和田 美珠	24
横浜市立中川西中学校	一年	本橋羽一音	26

●横浜DeNAベイスターズ賞

男女格差がなくなるには

横浜市立鶴ヶ峯中学校	二年	宇田 圓	29
------------	----	------	----

●横浜F・マリノス賞

アラブ人と呼ばれて

横浜市立汐見台中学校	二年	菊地フーリス	33
------------	----	--------	----

●ニッパツ横浜FCシーガルス賞

笑顔でいられる世界へ

横浜市立旭北中学校	二年	齋藤 由和	35
-----------	----	-------	----

●横浜ビー・コルセアーズ賞

子供の権利く病棟から

横浜市立共進中学校	三年	水谷 温美	38
-----------	----	-------	----



優秀賞

特別?いいえ、私もあなたも普通です

『話す』こと

笑顔

声の形

「知らない。」ということ

共に生きる

思いやりの想像力

可能性

違ってみえた横浜駅

一時の方向のエビフライ

お互い認め合う

誰もが同じ人間

無知

参加校紹介

応募状況

横浜市立新羽中学校	二年	石井 柚葵	41
横浜市立大綱中学校	二年	菊池 優羽	43
横浜市立日吉台中学校	三年	喜多 優妃	45
横浜市立あざみ野中学校	三年	根田 紘花	48
横浜市立生麦中学校	二年	佐伯 凛	50
横浜市立仲尾台中学校	三年	嶋本 咲花	53
横浜市立鶴ヶ峯中学校	一年	新庄 理咲	55
横浜市立秋葉中学校	一年	日向野 楽々	57
横浜市立田奈中学校	二年	福田 莉子	59
横浜市立六角橋中学校	二年	松本 なた	61
横浜市立富岡中学校	二年	森 遥希	64
横浜市立中和田中学校	三年	山村 実結	67
横浜市立南瀬谷中学校	三年	吉田 涼夏	70



入選者紹介（敬称略）

最優秀賞（横浜市長賞）

太田 圭胡

ぼくの夢見る未来

……………横浜市立保土ヶ谷中学校 三年

最優秀賞（横浜市教育長賞）

霧生 帆南

同情ではなく共感を、そして協力を。

……………横浜市立南高等学校附属中学校 三年

小野寺 航

自分とは違う自分

……………横浜市立六ツ川中学校 三年

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

長谷川 廉

体と心の支え

……………横浜市立釜利谷中学校 二年

中川 優実

「性別」という枠

……………横浜市立領家中学校 三年

最優秀賞（横浜市人権擁護委員長賞）

平田 裕音（ひらた ゆのん） 幸せかどうかは自分で決める……………横浜市立上飯田中学校 一年

和田 美珠（わだ みたま） 誰もが理解し合える社会とは……………横浜市立本宿中学校 三年

本橋羽一音（もとはし はいね） 自分らしさは宝物……………横浜市立中川西中学校 一年

最優秀賞（横浜DeNAベ이스ターズ賞）

宇田 圓（うだ まどか） 男女格差がなくなるには……………横浜市立鶴ヶ峯中学校 二年

最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

菊地フーリス（きくち ふーりす） アラブ人と呼ばれて……………横浜市立汐見台中学校 二年

最優秀賞（ニッパツ横浜FCシーガルズ賞）

齋藤 由和（さいとう ゆな） 笑顔でいられる世界へ……………横浜市立旭北中学校 二年

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

水谷 温美 子供の権利く病棟から……………横浜市立共進中学校 三年

優秀賞（氏名五十音順）

石井 柚葵 特別？いいえ、私もあなたも普通です……………横浜市立新羽中学校 二年

菊池 優羽 『話す』こと……………横浜市立大綱中学校 二年

喜多 優妃 笑顔……………横浜市立日吉台中学校 三年

根田 絃花 声の形……………横浜市立あざみ野中学校 三年

佐伯 凜 「知らない。」ということ……………横浜市立生麦中学校 二年

嶋本 咲花 共に生きる……………横浜市立仲尾台中学校 三年

新庄 理咲 思いやりの想像力……………横浜市立鶴ヶ峯中学校 一年

日向野 楽々 可能性……………横浜市立秋葉中学校 一年

入賞（氏名五十音順）

福田 莉子 ..... 横浜市立田奈中学校 二年

松本ひなた ..... 横浜市立六角橋中学校 二年

森 遥希 ..... 横浜市立富岡中学校 二年

山村 実結 ..... 横浜市立中和田中学校 三年

吉田 涼夏 ..... 横浜市立南瀬谷中学校 三年

青沼 俊希 ..... 横浜市立桂台中学校 三年

池田 光希 ..... 横浜市立戸塚中学校 三年

石塚早穂子 ..... 横浜市立鶴見中学校 三年

内田 想葉 ..... 横浜市立岡津中学校 二年

内海 玲奈 ..... 横浜市立谷本中学校 二年

違ってみえた横浜駅

一時の方向のエビフライ

お互い認め合う

誰もが同じ人間

無知

職業差別

挨拶と心の繋がり

声を上げるだけで変わる

著作権、あなたは大丈夫？

ブラックホールの抜け道をつくる

小柏 <small>おがしわ</small>	岡野 <small>おかの</small>	長田 <small>おさだ</small>	長内 <small>おさない</small>	杵渕 <small>きねぶち</small>	小池 <small>こいけ</small>	郡山 <small>ごおりやま</small>	佐藤 <small>さとう</small>	鮫川 <small>さめかわ</small>	鈴木 <small>すずき</small>	諏訪和香奈 <small>すわわかな</small>	竹並 <small>たけなみ</small>
優衣 <small>ゆうい</small>	初咲 <small>うさき</small>	毅 <small>つよし</small>	琴音 <small>ことね</small>	祥子 <small>さちこ</small>	澄玲 <small>すみれ</small>	唯花 <small>ゆいか</small>	玲 <small>あき</small>	博美 <small>ひろみ</small>	嘉乃 <small>かの</small>	智咲 <small>ちさき</small>	

不安なのはみんな一緒……………	あたりまえをくつがえす……………	外国文化の尊重……………	誰かの希望の光に……………	チヨコレートから考える「教育」……………	理解……………	コロナ禍で学んだ人との接し方……………	頼られる存在……………	知っていくこと……………	全ての子どもを取りこぼさずに……………	みんな自分と違う……………	私が学んだ事……………
……………横浜市立早瀬中学校	……………横浜市立あざみ野中学校	……………横浜市立老松中学校	……………横浜市立笹下中学校	……………横浜市立末吉中学校	……………横浜市立笹下中学校	……………横浜市立錦台中学校	……………横浜市立あかね台中学校	……………横浜市立すすき野中学校	……………横浜市立本宿中学校	……………横浜市立都田中学校	……………横浜市立岩井原中学校
一年	二年	三年	三年	三年	一年	一年	三年	三年	三年	三年	二年

苗代 なわしろ 喜琳 きりん

ヒロシマから学ぶこと……………横浜市立樽町中学校 二年

早川 はやかわ 晃生 あきお

耳が聞こえなくても話せる世界に……………横浜市立新田中学校 二年

原 はら 優斗 ゆうと

バスの中での出来事……………横浜市立菅田中学校 一年

樋口 ひぐち 綺乃 あやの

「見えない」という恐怖……………横浜市立旭中学校 三年

福田 ふくだ 璃奈 りな

コミュニケーションの近道……………横浜市立下瀬谷中学校 三年

松田 まつだ 紗帆 さほ

「性」も「個性」として向き合える社会に……………横浜市立鴨居中学校 一年

村田 むらた 茉莉依 まりい

人と違うこと……………横浜市立小田中学校 三年

森島 もりしま はな

未来を創っていくのは―……………横浜市立名瀬中学校 三年



最優秀賞（横浜市長賞）

## ぼくの夢見る未来

横浜市立保土ヶ谷中学校 三年

太<sup>おお</sup>田<sup>た</sup>圭<sup>けい</sup>胡<sup>こ</sup>

中学一年の時に、水泳部の部活中の事故で大怪我をしました。そして突然障害者になりました。脊髄損傷という大怪我で手術をし、リハビリをし、北海道で再生医療を受けました。でもぼくの右手と右足は今までの様に動きません。それでも周りの人の支えのおかげで、また水泳をできるまでに回復しました。手術してくれた病院の先生や看護師さん、北海道の先生、リハビリの先生に助けられました。今まで障害について、考えた事もなければ、自分が障害者になるなんて少しも考えた事ありませんでした。障害をもってからリハビリの時も診察の時も、ぼくより重い障害がある人に何人も出会いました。みんな挫けず、辛いリハビリや治療をがんばっていました。前とは違う体になってしまった自分を認める事ができないでいるぼくにとつて、とつても励みになりました。「前の自分だったら」とか「手や足が動けば」とかマイナスに考える事しかできなかった自分はずかしく思いました。中学の友達とは違う体かもしれない、できなくなった事や苦手になってしまった事もマイナスに考える事もなく前に進んでいこうと思いはじめました。同じパラ水泳のチームの人達の中には、知的障害の人や下半身が麻ひしている人、色々な障害がある人達が前向きに負けずにがんばっています。その姿に影響を受けて、また水泳を一からがんばろうと思いました。そして、練習を重ねていくうちに横



浜市の水泳大会にチームのメンバーとして出場することになりました。今までの大会よりも緊張して、何も考えられませんでした。それでも、今までに助けてくれた人のためにがんばろうと思って泳ぎました。自由形の五十メートルに出場して、ぼくはただがむしゃらに泳ぎました。泳ぎ終わった後、全力を出し切ってからつばのぼくの耳に、「四コースを泳いだ太田圭胡さんが今大会の新記録を樹立しました」というアナウンスと、大きな拍手が聞こえてきました。新記録を出したという驚きと嬉しさを感じました。そして、金メダルと賞状をもらいました。今までの自分自身の努力がむくわれた感じがして、すごく達成感がありました。金メダルが取れたことを入院中に心配してくれた親や友達に伝えたと、すっごく喜んでくれました。

ぼくが伝えたいことは、性別や、障害があるかないか、そういうことは関係なしに、みんながみんな、必ず来る明日のためにがんばって、努力しているということです。人それぞれ違いは必ずあると思いますが、そのかすかな違いを面白おかしくバカにしたり差別したりするのではなく、助け合ってみんな生きていく、そういう社会になってほしいと思っています。どんなに辛くても、どんなに苦しくてもぼくは入院中友達や家族に心配されたことを何年たっても忘れません。みんなが忘れていてもぼくは覚えています。希望を抱いて生きていこうと思います。

ぼくの夢見る未来は、差別がなくどんな人も笑って過ごせる未来です。障害や性別関係なくみんなが笑顔でいられる社会です。辛い事があっても助け合って乗り越えていけるように、必ず、ぼくがみんなを笑顔にします。それがぼくが夢見る未来です。これから先も差別を受けたり、みんなと違うことをしていくと思います。が、挫けずがんばっていききたいです。自分より重い障害がある人をたくさん見てきました。自分が今何をすべきか、何のために生きているのかを考え、今まで応援してくれた人のためにいつか、何年先であってもパラ

リンピックに出て北海道の方々、同級生のみんな、先生方や家族に必ず恩返しをします。それがぼくにできる  
ただ一つの事だと思っています。



最優秀賞（横浜市教育長賞）

## 同情ではなく共感を、そして協力を。

横浜市立南高等学校附属中学校 三年

霧<sup>きり</sup>生<sup>う</sup>帆<sup>はん</sup>南<sup>な</sup>

障がいのある方にとっての障壁は、歩道の段差等の物理的なものにはもちろん、情報の行き交いや意思の疎通におけるものにも存在しています。その中で私は、視覚障がいのある方々にとっての障壁のことを考えました。

私は本が好きで、学校で図書委員を務めています。また、図書館にもよく足を運びます。活字を見ることで気持ち落ち着き、読んだ内容に感動することもあるからです。また、本の感想を他者と交換することもあります。「読書」について考えると、視覚障がいのある方々にとって、点字は活字のような役割を果たします。しかし、点字を読めない視覚障がい者の方にとっては、目が不自由なことで、本から得られる情報や情動を共有しにくい障壁があります。それをどうにかして取り払いたいと、私は考えました。

私は、小学生の時に国語の授業で点字を学びました。たった六点で一文字を表現し、視覚障がいのある方も情報を伝達できる点字に感動しました。当初は点字を覚え、日常で出会うそれらを読めるようになりたい、という一心でした。けれどその後も興味は深まっていき、小学五年生の時には点字盤を買ってもらい、夏休みの自由課題として本を点訳することにしました。その時、点訳の仕方参考にするために、横須賀市点字図書

館へ行きました。

この図書館を利用する人の多くは、視覚障がいのある方や点訳ボランティアの方です。私は図書館の運営スタッフの方に点訳された本を見せてもらいました。この図書館に来たわけをお話すると、視覚障がいのある女性スタッフの方を紹介してくださいました。その方は点字そのものについて、また、点訳をする際の注意点について教えてくださいました。日常的に点字を読んでいるからこそ分かる、点字を読みやすくする工夫等の配慮は、彼女に出会えたからこそ、私にも気付けたことでした。点字についての話の後、私の通う小学校や好きな本についても話したり、彼女に質問をしたりしました。当時小学生だった私にとって、普段全く違う環境で生活している、年齢の離れた方と話す機会はありませんでした。そのため、この経験は、大変貴重なものになりました。そして、その時抱いた私の感覚は、障がいのある方と話した、というのではなく、人生の先輩から色々なことを教えていただいた、というものだったのです。

彼女は目が見えない分、耳からの情報を頼りにしていて、目が見なくなつてから、それ以前よりも聴力が発達したと話していました。普段聞いているラジオは、日常会話の二〜三倍の速さだそうで、私も実際に聞かせていただきましたが、全く聞きとれませんでした。障がいがあることで、そうでない人と同じようにはできないことがあっても、障がいのない人にできないことを、障がいのある人ができることもあるのです。

私はこのように、視覚障がいのある方と関わるまでは、障がいのある方に対して「大変なのだろうな」と同情する気持ちを抱いていました。しかし、「同情」は「違い」を基盤に相手を思いやることで、「共感」は「同じ」すなわち共通しているところを見つけて向き合うことです。私はこの経験から後者の大切さを学びました。

障がいの有無にかかわらず、人にはそれぞれの悩みがあります。「同情」は障がいの「ない」人から「ある」方への一方通行の感情になることがあります。「共感」は互いを思いやり、双方向に生まれ得る気持ちだと思います。「共感」から発する「協力」で、障がいの有無を越えて、障壁を取り払うことはできないでしょうか。もちろん今の世の中は、障がいのある方が支えられる場面が多いかもしれません。けれど、私の知り合った視覚障がいのある方の元へは、私には捉えられなかった光や音が届いていました。高質かつ迅速なテープ起こしをもその一つだと後に私は知りました。彼らだからこそできることで、私たちも支えてもらおう。「助ける・助けられる」関係性を固定化しない。助けが必要な面を互いに理解し合い、助け合える間柄でいられること、それを私は目指したいと思います。

同情ではなく共感を、そして協力を。同じ心に根ざして行われるならばそうありたい。私は社会の一員として、協力の土台となる「橋渡し」のできる存在になりたいと考えています。これからも点字を学んで、点訳を積極的にして、点字を読めない方には、点字の特徴や素晴らしさを届けながら、字だけで表現しきれない感覚的な素晴らしさも共有できるようにしていきたいです。一方通行ではなく双方向に。誰とでも協力し合える社会を築き上げられることを信じて。



最優秀賞（横浜市教育長賞）

## 自分とは違う自分

横浜市立六ツ川中学校 三年

小野寺航

僕は小学校五年から父の仕事の都合でカメルーンとフランスに二年ずつ住んでいました。その四年間でさまざまな経験をしました。楽しくて嬉しいことも沢山あれば、悲しくなることも沢山ありました。特に、フランスで受けた差別は僕を傷付けました。

カメルーンはアフリカ中部に位置する国で、文化が日本とは全く違っていました。特に、色取り取りな布や衣装は興味深く、すばらしいものでした。学校では多くの国の人と友達になれて嬉しかったです。その友達は僕が自分の英語力を馬鹿にされている時に、励ましてくれる存在でした。そんな存在が僕の側にいてくれることに僕はいつも感謝していました。

カメルーンでさまざまな経験をした後、僕は南フランスのマルセイユという町に移住しました。マルセイユは港町で、海がとてもきれいです。そしてフランスで最も国際的な場所の一つとして知られています。驚くことに、僕が通った学校には約八十カ国から来た人達が通っていました。ところが、僕はこのような国際的な場所です。初めて差別を受けました。

差別は僕が思っていたよりも酷いものでした。レストランに行けば僕達だけに挨拶をしない店員がいて、席

が空いているのに入るのを拒否されたりしました。このような小さなやがらせが蓄積されて僕を傷付けました。「なぜ同じ人間なのに？」と自分に問いかけることが何度もありました。そのような差別の中で僕が一番嫌だったのが見た目で判断されたことです。見た目が同じだからと日本人ではなく、アジア人とひととめにされました。同級生の一人はブルガリア人で僕にとっても冷たく、特に感じが悪かったです。僕は彼が日本のアニメや漫画が好きと聞いたので、積極的に話してみようになりました。そこで、彼は僕が日本人と知ると、今までの冷たさが嘘のように話しをしてくれました。僕は嬉しくなると同時に悲しくなりました。僕が日本人ではなかったら、彼はどうだったのでしょうか。日本人だからといって彼が僕を特別扱いするのは間違っていると思います。全てのアジア人が対等に扱われなくてははいけないと思いました。

フランスに住んで約一年後、コロナウイルスという奇妙なウイルスが急激な勢いで伝染し、世界中の多くの人達が亡くなり、苦しみました。そして、コロナウイルスがもたらしたのは死だけではありませんでした。コロナウイルスが発生したのがアジアの国中国だからといって、各国でアジア人が無差別に攻撃されたのです。毎回ニュースでアジア人が攻撃されていると聞く度に怒りが湧き、悲しくなりました。実際僕も、このウイルスの発生を理由に、差別をされました。ある日の部活帰りに、同じ学校に通っている二つ年上の人達から石を投げられ、「コロナ」と呼ばれました。僕はその時、自分がまるで違う自分のように感じて悲しくなりました。更に、僕に石を投げて差別をした人達が、北アフリカから来た人達だったことにも僕は驚きました。なぜなら北アフリカの多くの人が信仰しているイスラム教が今、世界中で差別を受けているからです。僕はなぜ同じ差別を受ける人同士が差別をし合わなければいけないのかと強く思いました。

このような差別に僕は傷付き、悲しみました。しかし、僕は悲しむだけではなく、乗り越えるようにも心掛

けました。それは、相手の考え方や文化を理解し、尊重することです。そのような行動を心掛けていると、僕に差別をしていた人も同じように僕の考え方や国を理解してくれました。僕はそれがとても嬉しかったです。また、このような差別を経験した僕は他の人に同じようなことはしないと誓いました。いつか地球上にいる全ての人が対等に関わり、幸せに暮らす日が来ることを僕は願います。





最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

## 体と心の支え

横浜市立釜利谷中学校 二年

長谷川 廉

近年では、「障害者」という事に対する意識は大きく変わりつつあり、障害について理解する人も徐々に増えてきていると言う人もいる。しかし、自分はそうは思わない。確かに障害のある人のための施設が増えてきていたり、生活しやすいようにスロープを設置したりと公共のものなどには対策が施されてはいるが、一人一人の意識が変わらなければ意味はないと自分は思う。なぜ自分がここまで「障害者」に対する現状を強く否定するのかというと、自分が過去にとっても不愉快な現実をつきつけられたことがあるからだ。

それは自分のサッカーの遠征の帰り、とある駅での出来事だ。その日は日曜日だったのにも関わらず人の少ない夕方だった。自分がホームで電車を待っていたら、エレベーターを使って一人の男性が上がってきた。その男性はサングラスしていて手には棒を持っていて足取りが妙に不安定だった。しかし、点字ブロックを伝って歩いている姿を見て自分はやつと気付いた。「目が見えていないんだ。」そして自分は少し心配になった。なぜなら、その駅の横幅はあまり広くなく、ホームドアもまだ設置されていないため目が見えない人には危険だったからだ。だが、自分は点字ブロックの先の光景を見て更なる不安に襲われた。その先には点字ブロックの上に煙草を吸い、携帯を見てしゃがみこむ大学生くらいの男子が三人固まっていた。その学生は携帯に夢中

で男性に気付く様子もない。男性も気付けるわけもなく男性の棒が学生に当たってしまった。男性は何にぶつかったかもわからず焦っていた。戸惑う男性に向って学生達は放ったのは謝罪でも心配の言葉でもなく文句だった。学生達はしばらくしてから男性が障害者であることに気付いても文句を止めなかった。逆に障害を持つていることに対して面白がり始めたのだ。駅のホームには他の大人も何人かいたが、目をそらしたり、視線をスマホに落したり、皆が見て見ぬふりをしていたのだ。自分は目の前の光景に居ても立ってもいられなくなった。正直、できればあまりその学生とは関わりたくはなかった。しかし自分は、もう我慢ができなかった。他に誰も男性に救いの手を差し伸べる人がいなかったことにも腹が立ったからだ。自分は恐る恐る男性に近づき手を取り誘導し電車に乗るまで付きそった。男性は電車の中で自分に言った。

「こういう事はしょっちゅうあるんだ。だからもう慣れてしまったよ。でも、助けてくれたのは君が初めてだよ。ありがとう。」

自分は男性と別れて家に帰ってもこの言葉が忘れられなかった。自分はこのとき初めて障害者差別の現状と障害を理解し、助け、支え合う人の大切さと少なさを実感した。

この経験から多くの事を学んだ。そして、自分なり考えをまとめるようになった。自分は差別に対してこう考える。確かに施設やスロープなどを設置する事は生活を支えるには必要であり、重要である。しかし、どんな施設も器具も人の支えには敵わないのだ。そして身近な支えほど体にも心にも支えをもたらすのだと思う。一人一人が「障害」を深く理解し助け合い、行動し、その輪を広げていくのだ。未来の社会を築く我々学生達が身近な支えから始めて、この危険で不平等な世界を誰もが安心して暮せる平等な世界に自分達の手で変えていかなければいけないと自分は考える。



最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

## 「性別」という枠

横浜市立領家中学校 三年

中<sup>なか</sup>川<sup>がわ</sup>優<sup>ゆう</sup>実<sup>み</sup>

自分では選ぶことのできない、性別。男なのか、女なのか、その違いで苦しんでいる人がいることを、知ってほしいと思います。

これから書くのは、私の小学生の時の友人についてです。今は遠くへ引越してしまい会えていませんが、「ジェンダーの平等」という言葉を聞くと、私は必ず彼女のことを思い出します。

彼女とは、小学二年生の時に出会いました。第一印象は、男女問わず誰とでもすぐに仲良くできる活発な女の子でした。しかし、親しくなるにつれ、どこにでもある普通の女の子ではない、と感じ始めました。理由は彼女が口癖のように言っていたある言葉にあります。

「中学生には、なりたくないんだ。だって、制服はスカートでしょ？そんな女子っぽい着たくないよ。」女子の制服はスカート、が常識だと思っていた私には全く理解できませんでしたが、理由を聞くのは憚られました。彼女がこのことを話す時の表情や声音から、これ以上は聞かないで、という雰囲気を感じたからです。

理由の聞けないまま、二年が経とうとしていた、小学三年生の冬。当時の私にとって忘れられない出来事が起きました。きっかけは、彼女の持っていたキーホルダーです。いつもは絶対に持っていないような、とても

可愛らしいものだったため、思わず「それかわいー！女の子らしくていいねー！」と言いました。すると彼女は急に声を荒らげ、「おねがい、やめて！女の子って言わないで！」と叫びました。彼女の動揺の激しさに、私は謝ることしかできず、ひたすら謝りました。それに加え、なぜ「女の子らしい」という言葉が嫌だったのか分かりませんでした。女の子だから女の子らしい態度でいなさい、女の子だからランドセルは赤にしない、などと言われてきた私にとって「女の子らしい」は褒め言葉だったからです。自分の性別に違和感を感じる人がいることを知り、人を男女の枠の中だけで見てはいけないということに気づいたのは、彼女が引越してからずっと後のことでしたが、この出来事があった後もそれまで通りに接してくれた彼女にとっても感謝しています。そんな彼女が、今どのように過ごしているのか私は知りません。ですが、理解ある環境に恵まれて幸せに生きていることを願っています。

彼女は私に大切なことを教えてくれました。彼女は「性別」という枠から飛び出し、「自分らしさ」を大切にしたい、という考えを持っていたから、「女の子らしい」という言葉を嫌だ、と感じたのだと思います。男の子らしい、女の子らしい、という言葉は一般的に褒め言葉です。この言葉をかけられて嬉しくなる人も大勢いるでしょう。しかし、それは全員ではなく違う考え方や感じ方をする人もいる、そのことを彼女は教えてくれました。

私の友人のように、性別が原因で悩みを抱えている人は世界中に大勢います。性同一性障害支援機構による発表では、心と体の性が一致しない、性同一性障害（G I D）に悩む人は、世界で約二千八百人に一人の割合でいるそうです。今は昔に比べ、トランスジェンダーの方々への理解が深まってきています。例えば、私の通う中学校の制服はスカートかスラックスかを選択できるようになりました。ですが、差別や偏見が無くなっ

たわけではありません。トランスジェンダーの人が幸せに暮らすためには、社会のしくみも、人々の理解も足りていないのです。

「性別」とは、個々の個性の一部であり、性別という枠にとられすぎたために苦しむ必要はない、と私は考えます。「性別」という枠を飛び出して自分らしさを大切にしている人がいること、そしてそれは恥ずかしいことではなければおかしなことでもないことを、より多くの人に知ってほしいです。世界中の人がその人らしく生きるためには、性別や人種といった枠から飛び出し、相手のことを一人の人間として考え、接することが大切なのではないでしょうか。



最優秀賞（横浜市人権擁護委員長賞）

## 幸せかどうかは自分で決める

横浜市立上飯田中学校 一年

平<sup>ひら</sup>田<sup>た</sup>裕<sup>ゆ</sup>音<sup>のん</sup>

「可哀想に」この言葉は、誰かを想って出てくるものだろう。でも、私は知っている。この一言には、相手を傷つける時がある事を。

私には、小さな時から顔や首、まつ毛に白い部分がある。「白斑」という肌の病気で、肌が白くなっているのだ。幸い、この病気には痛みも身体のダルさも無い。ただ、見た目が少しばかり変わるだけ。だから、周りと変わらない生活を送れる自分が「不幸」だなんて、思うはずが無かった。けれど、私と周りの人の考え方は違い、周りからは、私が可哀想に見える様だった。

可哀想だと言われても、まだ初めの頃は、私を心配してくれているようで嬉しかった。でも、何度も何度も言われていると、その内嬉しいという気持ちは小さくなり、息苦しさが大きくなっていった。なぜ嬉しいと思わなくなったのか自分でも分からず、モヤモヤが続いていたある日。お母さんから、「仕事場を見に来ないか」と誘われた。お母さんの仕事には元から興味を持っていた為、私はすぐに行く事を決めた。

お母さんは弁護士として働いている。車で向かった先は、もちろん介護施設だ。いざ中に入ってみると、車イスに乗っている人・体が不自由な人・心がとても不安定な人など、本当に多種多様な方々がいた。しばらく

近くの方達と話をしていると、部屋の端の方で静かに外を眺めている一人のおばあさんに気が付いた。そのおばあさんは車イスに乗っており、私がそばに行き挨拶をすると、とても可愛らしい笑顔を見せてくれた。日頃の楽しみや趣味の話をしている内に、すっかり意気投合し、帰る時間ギリギリまでその方と話をしていた。その後急いで荷物をまとめ、最後の挨拶をする。そして、すぐに帰る、はずだった。突然後ろから「ちょっと待って。」と声をかけられる。それは、さっきのおばあさんの声だった。おばあさんは車イスでこちらに来て、少ししてから、「次は無いかもしれないから今伝えておくわ。」と言う。私が静かに待っていると、おばあさんはゆっくり話し始めた。「貴方の顔の白い所はなぜそうなのか私は知らないし、貴方がどう思っているかも分からない。でも貴方の白いまつ毛は凄く綺麗で、貴方の笑顔はとても可愛らしいわ。もっと自分に自信を持ちなさい。」

予想外の話に、しばらくは言葉が出なかった。私は普段、肌の病気の事をあまり人に話さない。可哀想と言われたり、会話を止めてしまうのが怖かったからだ。だから、おばあさんにその話をされるとは思いもしなかった。その驚きを隠せない中で、自分の中にあつたモヤモヤが消えていくのが、確かに分かった。

私のモヤモヤの正体、それは、「可哀想という言葉一つで私が不幸かどうかを決めつけたいで欲しい」という意思から出来たものだった。この時以来、おばあさんには会っていない。でも、可哀想と言われる事が凄く減った。それは、私が自信をもって「幸せだ」と言えるようになったからだと思う。だが、「幸せ・不幸せ」の区切りは曖昧で、自分自身でしか分からない。その為、自分では幸せだと思っても、他の人にとつては不幸せかもしれない。そして、この二つの中におさめる必要も無いという、ややこしいものだ。だからこそ私は、多くの人に、自分はどうかと考えるみてほしい。もし、その想いを周りに発信出来たなら、不幸な人

は今を変える努力を、幸せな人は、周りを変える為の行動をとれるだろう。

それを踏まえて、一つ言わせて欲しい。

私は可哀想ではない。『幸せ者』だ。





最優秀賞（横浜市人権擁護委員会会長賞）

## 誰もが理解し合える社会とは

横浜市立本宿中学校 三年

和田美珠

病気を隠す。ある一般的な考えです。他人に迷惑をかけないように、自分の病気を隠す。これは正しい事なのでしょうか？

私の両親は精神障害者です。健康な人とは少し違います。私は、幼い頃から親の病気を知っていました。我が家の教育方針が病気を隠さないという事だったからです。父の症状は、今来た道に戻ったり、嫌な数字を見てしまうと、お風呂に入り直すなど少し理解しがたい病気です。そして母は、症状が出てしまうと、何も考えられなくなり動けなくなる。夕飯などが全く作れなくなります。その中で、生活してきた私は症状が出る親と街を歩くと、大人の冷たくて痛い視線がとても嫌でした。出来るだけ友達と会いたく無かつたんです。でも、そんな親が居るからこそ学ぶ事もあります。それは精神障害者だろうが、無かろうが幸せに暮らせるし、あまり障害を持っていない人と変わらないという事です。大変な事はもちろんあるし、私だって、両親の障害を理解しにくい事もあります。しかし、小さい頃から病気の事を伝えてきてくれたからこそ、症状が出る時の対処法が分かります。障害のある両親だけど、色々な家族の幸せのカタチがあるように、我が家の幸せのカタチがあります。

障害を隠さないで生きる。今の、精神障害者の人々はそれがとても難しい事らしい。私も前、引越しをする事になった時、両親が「精神障害者です。」と言うと、すぐ断られてしまった事があります。両親が受けている相談の中にも、「子供に病気の事を隠した方が良いですよね？」という相談が来ます。私は病気の事を隠されて来なかったからこそ、「そういう家庭もあるんだなあ。」と考えさせられます。

今の社会は、精神障害者に対してのイメージがとても悪いと思います。すぐ暴れるのでは無いか？人を殺すすのでは無いか？何も知ろうとしない人がそうやって、自分とは違う人に対して固定観念を持ってしまふ。これが本当に障害者が生きやすい世の中なのでしょうか？何故、精神障害者だと、人を殺すと思うのでしょうか。この病気を持って居ない人でも、人を殺す人だって居るはずですよ。精神障害者だろうが無かるうが、良い人だって悪い人だって居ると思います。精神障害者に対して悪いイメージを持つ人が多いからこそ、隠さなければいけないと思う人が多いのだと思います。本当にこれが、誰もが生きやすい世の中なのでしょうか？結局は、自分が良ければ良いという考えになってはいませんか？

私は思います。大切な事は、伝えていくという事です。精神障害についてもっと伝えていくべきだと思います。身体に障害のある人とは違い、精神障害者は目に見える障害では無い為、助けを求めづらい。だから、もっと伝えていって、理解してもらおう事が大切です。そうしていく事で、精神障害者が肩身を狭くして生きる事が、少しでも減るのでは無いかと思います。色々な人が居るし、色々な意見があると思います。でも、それは良い事です。しかし、一概に精神障害者の全員が全員悪い人だと決めつけないでほしいです。そして、精神障害者が自分の病気を隠さずに、自分らしく生きられる社会になってほしいと思います。その為に私は、この両親の元に産まれたからこそ、これからも伝えていきたいと思っています。



最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

## 自分らしさは宝物

横浜市立中川西中学校 一年

本<sup>もと</sup>橋<sup>はし</sup>羽<sup>はい</sup>一<sup>い</sup>音<sup>ね</sup>

人と違うのは悪いことなのだろうか。小学校三年生の私は、いつも考えていた。その頃の私は、声が小さく自分の意見をはっきりと言えず、周囲の人から「変わっている」とよく言われていた。私は、そんな自分が嫌いで仕方がなく、段々と教室の隅にいるようになった。そして、こんな学校生活がいつまでも続いていくと思っていた。

しかし、そんな私を変える出来事があった。ある日の休み時間、いつも通り教室の隅で本を読んでいた。すると、ある女の子が私に話しかけてきたのであった。「何でそんな場所にいるの。」と明るく笑顔で聞いてきた。私が、自分の考えをきちんと言えずに「何となく。」と答えると、「一緒に校庭へ行こう。」と誘われた。「少し考える。」と言って、その場を乗り切るつもりだったが、その子は私の手をつかみ、気付くと校庭に移動していた。その子が面白い話をしてくるので久しぶりに笑顔になった。その時、その子が私に言った。「笑っていた方が楽しいでしょ。」周囲の目を気にしていた私は、「でも、そんな行動をしていたらまた誰かに何か言われる。」とつぶやくと、笑われた。そして、「あなたが何をしようが自由でしょ。周囲の人の目は気にしないで。」と言われた。半信半疑だったが、私はそれを実行してみることにした。自分の考えをはっきりと笑顔で

言ってみたり、教室の隅にいるのを辞めてみたりした。自分の好きなものなどは変えずに堂々と話した。すると、不思議なことに周囲の人の態度が変わっていき、友人が集まってくるようになったのである。私は、あの子が言っていたのは本当だったと思った。お礼をするために、その子に会いに行くと、「良かった。それより遊ぼうよ。」と言ってくれ、また遊んだ。

その日の楽しさは、私の記憶の中で最も印象が強く楽しい思い出である。

この経験から、私は学んだことが三つある。

一つ目は、自分の個性を認めて自信を持つということである。声小さくても、好きなものに対して周囲の人が理解してくれなくても、自分を周囲に合わせて偽るのではなく、自分らしさを大切にすることだ。自信を持たなければ、全てがマイナスな方向へいく感じがしたからだ。

二つ目は、周囲で悩んでいる様子の人がいれば、声を掛けるなどという優しさを持つことである。苦しいと思っている人や助けを求めたい人でも「助けて。」の一言が言えないものである。私も当時、助けを求められずにいた。しかし、その中で一人の女の子が声を掛けてくれたから、一歩踏み出すことが出来たのだ。あの子が私にしてくれたような優しさを持って、人と接していきたいと思う。一言声を掛けるだけでも、相手の人生が変わってくるのだと身をもって感じたからだ。

三つ目は、互いに尊重し、認め合って生きていくことの必要性である。普段、人が生活している中でそれが当たり前だと思っている人もいるのではないか。しかし、自分が見えてないだけで、「変わっている。」などと色々なことを言われて苦しんでいる人は、実際にいるのだ。私がそうだったように。私は、自分が言われた時の悲しみ、苦しみを知っているから、他者の人格を尊重していききたいと思う。また、相手の話から、その分野

に興味を持ってみることも楽しそうだ。

自分らしきがあるからこそ、人と会話をしている楽しいと、私は感じる。自分らしきとは世界で一つしかない宝物なのだ。過去のような経験は、もう二度としたくはなく、他者にも経験して欲しくはない。そのために、自分らしさを忘れず、相手を尊重していききたいと思う。



最優秀賞（横浜DeNAベイスターズ賞）

## 男女格差がなくなるには

横浜市立鶴ヶ峯中学校 二年

宇田 圓

私は柔道部に所属している。

柔道部では例年、夏の県大会が終わると、三年生から二年生へと代が替わる。今年の二年生は男子三人、女子二人だ。その中から部長と副部長を選ぶ。

夏の県大会の少し前のある日、A先輩とBさんとCちゃんと私で話していた。

「わたし、部長になりたいな。」

私以外のもうひとりの二年生女子のCちゃんが言った。するとB君は

「女子は副部長でいいじゃん。」

A先輩も

「柔道部は代々男子が部長だから、今年も部長は男子だろ。」

と言った。

それを聞いたCちゃんと私は驚き、そして怒った。Cちゃんは、個人戦で県大会に進む实力があるだけでなく、後輩にきちんと注意できる、人望の厚い子だ。女子だからという理由だけで部長になれないのはおかし

い。

「今どき時代遅れですよ。」

「部長になるのに男子も女子も関係ないではありませんか？」

私たちのあまりの剣幕に、A先輩とBくんは一瞬驚いた顔をしていた。

数日後、県大会が無事に終わり、部長決め当日になった。部長や副部長は、一・二年生の投票と、三年生の助言で選出される。一・二年生に投票用紙が配られて、役職ごとに名前を書いている間、三年生と先生が廊下に出て、話し合っていた。すぐに名前を書き終わった私は、ドキドキしながら先生たちが入ってくるのを待っていた。思いのほか、先生が早く入ってきた。そして発表の瞬間だ。

「部長は、C。」「副部長は、圓。」

私はCちゃんのほうを見た。そうしたらCちゃんも私のほうを向いたので目が合い、二人でうなずいた。女子が部長と副部長に選ばれたのだ。

これと同じ時期、ジェンダーギャップ指数についての記事を読んだ。ジェンダーギャップ指数とは、各国の男女格差を数値化したもので、男女平等格差指数とも言われている。目的は、各国が自国の男女格差がどれくらいあるかを把握し、解消することだ。

ジェンダーギャップ指数は、教育／経済／保健／政治の四分野で構成されていて、日本の二〇二〇年の順位は百五十三か国中百二十一位と、とても低くなっている。特に経済分野と政治分野で後れを取っていて、経済分野は百十五位、政治分野は百四十四位だ。その背景には政治家や医者などの女性の割合が低く、中でもリーダー的役割に就いている女性が少ないことがあるそうだ。

実はこの記事を読んでも、あまりピンとこなかった。日本は男女格差が大きい国だとは思えなかったからだ。中学校の校長先生は男性だが、小学校の校長先生は女性だし、今の生徒会長も女子だ。女性でも希望すればリーダー的役割に就いていると思っていた。

また、ジェンダーギャップ指数の順位を上げることが大切だ、ということも、あまり納得できなかった。男性でも女性でも、能力を活かして、なりたい職業に就けていけば、みんな幸せなはずだが、それでも男女格差がある、と言われるのだろうか。政治家や医者数が少ないと言うだけでは、それが問題かどうかは分からない。

そう思っていたら、母が医学部の不正入試問題を教えてくれた。それは二〇一八年に発覚したもので、入試の時、浪人生や女子生徒に不利に減点をしたり、特定の生徒を優遇したりして、不適切な得点調整をしていた問題だ。女性は結婚や出産で医療の現場を離れるのではないかと心配されたため、減点をしてもらいたい。つい三年前までこのようなことが起こっていたことに驚いた。とても納得できないことだ。性別に関係なく、医師になりたい人の中から優秀な人が合格するようにしないとおかしい。結婚や出産で女性が医療の現場を離れてしまうことが心配なら、その仕事を続けられるような仕組みにすればいいはずだ。この不正入試問題が表に出たことで、医学部を志望する女子の差別がなくなってきたが、それは当然のことではないだろうか。

日本のジェンダーギャップ指数の順位が今後どのようになるかは分からない。日本にはまだまだ男女平等でない仕組みや風潮があるかもしれない。でも、誰が見ても部長に適任のＣちゃんが柔道部の部長に選出されたことや、理不尽な得点調整をされていた医学部の問題が解決したように、私の周りでは確実に男女格差がなくなってきた。



男女の差別があるのはおかしいという考え方がもっと広まれば、自然と格差もなくなるのだろう。性別にかかわらず、やりたい人、適性のある人、能力のある人が、自分の望む仕事や地位に就けるよう、願っている。



最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

## アラブ人と呼ばれて

横浜市立汐見台中学校 二年

菊地きくちファールリス

「私は、あなたがアラブ人だから初めは近づかないようにしていました。それは、アラブ人が嘘つきだからです。でも一緒に過ごす時間の中であなたが嘘つきではないと知り、仲良くなれて嬉しかったです。」

これは、僕の妹が、以前に在籍していた学校を転校する時に、クラスのお別れ会で一番仲良くしていた友達から送られた言葉です。これを聞いて、妹は深く傷つきました。僕たち家族もショックを受けました。

僕の父は、エジプト人です。僕の母は、日本人です。僕と妹は、エジプトのカイロで生まれ育ち、僕が小学校へ入学する時に、トルコへ行きました。トルコでは、日本人学校で小学一年から中学一年まで学びました。そこで出会った人たちにいつも感じていた違和感がありました。仲良くしているようで、見えない壁のような存在を感じたのです。

そのもやもやした存在が、妹の友達の言葉ではつきりしました。僕たちは、アラブ人と呼ばれ、出会う前から危険な存在であると認識されていたのです。果たして、子供たちが自分でそのような認識をするのでしょうか。きつとまわりの大人たちが子供たちに警告したのだと僕は考えます。

アラブ人とは、アラビア語を母国語とするアラビア半島や西アジア、北アフリカの人々を指すそうです。い

くつもの国と地域に広がるアラブ人を、全員まとめて一つの性質で表すことは不可能です。日本人を例に挙げても性格はそれぞれ違い、それぞれが豊かな個性を持っています。日本の中で、日本人のことになる、個性を認識できるのに、自分たちとは違う存在になると、途端に想像力を発揮できなくなるのはどうしてでしょう。

僕は、みんなに、先入観を持たず、何事も自分の目で見て判断して欲しいと思います。もしかしたら、お互いに良き理解者となり、仲良くなれるかもしれない世界の人々との出会いを、噂話や偏見で失ってしまうのは悲しいことです。まだ何の先入観も持たない子供へ、大人たちが必要のない先入観を植え付けているのなら、それは子供のためではなく、子供の未来を奪う行為です。

妹は、友達の言葉に傷つきながらも、その友達とこれからも仲良くしたいと言いました。なぜなら、友達に最終的には自分を嘘つきではないと分かってくれたからだと言います。僕をアラブ人だと言う人もいれば、エジプト人や、日本人だと言う人もいます。僕が何人であっても、僕は僕らしくいようと思います。それが、国籍や宗教に関係なく、お互いがお互いの個性を認め合え、尊重し合える未来への一歩となることを信じています。



最優秀賞（ニッパツ横浜FCシーガルス賞）

## 笑顔でいられる世界へ

横浜市立旭北中学校 二年

齋藤由和

私には十二歳年下の弟がいる。ダウン症からくる障害がある。生まれた時、父に写真を送ってもらった。写真を見た時は、障害があるんじゃないかと思った。ダウン症にはどんな障害があるのか弟が生まれる前でもなんとなく知っていた。写真を見ただけに大変そう、かわいそうとか少し同情してしまった。生まれてからずっとそう思っていた。弟が退院したのが嬉しくて家にはじめて来た時は抱いてあげたり、世話を手伝った。りした。大きくなったらもつと大変になるかもと心の中では思っていた。

そんな私の考えを変えたのは小学校六年生の時、弟と同じ障害のある人だった。その人が学校の帰り道に、「こんにちは。」

と言って、話しかけてきた。そして、ご飯の話や公園にいた猫の話などをしてきた。その人はとても楽しそうだった。自分が今まで思っていた障害がある人への考えが変わった。とてもおだやかで優しい人なんだと感じたからだ。それまでの自分の考えは差別だったと気づいた。思い込みだけで人を判断していたんだと思った。弟にもそういう気持ちを持っていたと思うと心が痛くなった。

家に帰ってどうして差別していたんだろうと思った。かわいそうと思っていたことは正しいことか、心配し

ている気持ちからなのか、その人の気持ちに寄り沿っていることになるのか考えこんだ。でもそれはきちんとした理由もなく区別し、それが差別なんだと思った。

ある日、また考えさせられることがあった。学校帰り友達と歩いていたら、この間話しかけてくれた人が歩いているのを見た。目が合ったから、

「こんにちは。」

と言ったら、

「こんにちは。」

と返してくれた。すると後ろにいた男子達はその人に

「こんにちは。」「こんにちは。」

と、何回もしつこく気分が良くない感じで言っていた。とてもいやな気持ちになっただろう。

その人は、

「やめて。」「やめて。」

と言って、走り出してしまった。男子達は、あきらかにその人をバカにして言っていたが、悪いことだと全く感じてもないように見えた。私は男子達の行動に信じられない気持ちで何も言うことができなかった。怒りと悲しい、悔しい気持ちがこみ上がってきた。「自分の弟もこんなふうに言われたらいやだな。」

と思った。

障害がある人のことも知らず、好き放題言っって人を傷つける人は許されない。障害についてもっと知るべきだと思う。だから私はこの作文を通していろんな人知って欲しい。普通の人より劣るところがあるかもしれない

ない。だけど変に優しく接したり、手助けしたりするのは違うと思う。その人がやろうとしていることを尊重して、誰にでも平等に、もし困っていたらその人を助けてあげられれば良いと思った。

もし、自分の家族だったらと考えてみて欲しい。その人への寄り沿い方に正解はないと思う。けれど、その人の気持ちを考えることができれば傷つく人はいなくなると思う。傷つけるようなことをしている人にそれは間違っていると言える勇氣を持つとうと思った。そしてこれは誰もが持たなければいけないものだと思う。そのため障害について知ること、知ってもらうことが大切だと考える。

これから先、誰もがお互いを尊重し、助け合い、そして、誰もが笑顔で過ごせるような世界を目指して。



最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

## 子供の権利／病棟から

横浜市立共進中学校 三年

水谷温美

私は今、入院している。子供だけが入院している病棟だ。

入院当初は人が怖く、看護師さんの笑顔でさえ怖く感じた。それでも看護師さんはいつも明るく優しく、私が描いた絵をほめてくれた。夢を聞いてくれた。日々の関わりの中で人と話すのは楽しいこと、と意識が変わっていった。少しずつ個室から出られるようになり、他の病室の子とも話せるようになった。

最初に友達になった子は、摂食障害で体重が落ちすぎていた。父親は自分が行けなかった大学に行かせるために勉強をさせ、貴重な面会時にも教材を買ってきては勉強の進み具合を確認する。上の子が行かなかった分、下の子への期待が大きいという。

すぐに癇癢を起してしまう子もいる。欲しい雑誌が買えず、物をがんがんに叩き足でドンッと音を出す。入院前は常に母親と喧嘩し、母親と祖母もまた常に喧嘩をしていたという。母親と街中で喧嘩をしているとき、仲の良さそうな他の家庭を見て「いいなあ」と言ったら「黙れ」と言われたそうだ。親と喧嘩をしてしまうのが怖くて面会拒否をしている。

一人目は、自分の好きな時に好きなように勉強する権利と進路を自分で決める権利が損なわれている。二人

目は、感情の伝え方や正しいものの考え方について教わる権利が損なわれている。

親一人のちよつとした言動や行動は、子に多大なる影響を及ぼす。子にとって親がすべてで、どの子も親に愛される権利や夢を持つ権利がある。その権利を、大人、ましてや親が奪ってはいけない。

ここは命を守るために存在している。児童相談所から直接ここに来た子もいる。歩くこともできないくらい細くなり車椅子移動の子もいる。ここにいるほうが楽しいと退院拒否する子もいる。

ここは子供の権利が守られている。ケースワーカーさんと一緒に、院外散歩をする。卓球をしたり、歌を歌ったり、将来についても話したりする。院内学級に通う子もいる。

子供のすべての権利を優先させて考えることは難しいのかもしれないが、不可能ではないはずだ。少なくとも私の両親は、その子供の権利を守ってくれていると感じるから。

私はもうすぐ退院して、その両親の元に戻っていく。

退院後は、好きな時に絵を描き、受験勉強をしたい。退院が身近なものとなり、やりたいことがあるって幸せなことだと実感してくる。人が怖くてふさぎ込んでいた時の私は無気力で、生きることさえもあきらめかけていた。人が持つ最大の権利である生きる権利を捨てようとしていた。もしあの時、入院していなかったらと考えると恐ろしい。

生きるということは難しい。自分だけがこの世界に生きていくわけではないから。一人ひとりそれぞれ必死に生きている。私も、私の両親も、私の友達も必死に生きている。誰一人として自由に生きる権利を持っていない人はいない。受験をすれば、ほかに生きている方が受かり、自分が落とされるかもしれない。就職活動すれば自分が落とされるかもしれない、友達とうまくいかないかもしれない。何をやるにもやる気が起きない



かもしれない。

でもいつどこでいかなる時も人は生きるといふ権利を持っている。生きるって難しい。でも、いろいろあるから面白い。難しくなきやつまらないじゃないか。人は生きて経験を積むから人間性が構成されて、一人ひとりの個性が生まれていくのだから。

こうして私は、受験真っ只中の中学生にワープする。不安と期待でドキドキするが、笑顔でみんなに「ただいま。」と言いたい。そして「よろしく」と。



優 秀 賞

## 特別？いいえ、私もあなたも普通です

横浜市立新羽中学校 二年

石<sup>いし</sup>井<sup>い</sup> 柚<sup>ゆず</sup> 葵<sup>き</sup>

「ああ、何も特別ではないのだ。」

心の中でストンと落ちるものがありました。私は授業でLGBTを扱った映像を見ました。いろいろな人が自分の思いをカミングアウトしている映像は、悩んだ末の結果であることが強く感じられました。

皆さんの好きな人はどんな人でしょうか。異性、同性、特に好きな人はいないなど様々だと思います。ちなみに私は、異性・同性のどちらとも好きになったことがあります。まず初めに異性を好きになりました。その時の友達の反応は様々でしたが、「頑張れ」など応援してくれる声が多かったと思います。そして次に好きになった子が同性の子でした。私も最初は「ただ勘違いをしているだけなのでは」と思い認めることができませんでした。その子の透き通った声を聞く度に、「私はやっぱりあの子が好きなんだ」と認めざるを得なくなりました。好きだと気がついた時、これを友達に言ったらどんな反応をするのだろうか。気味悪がられたらどうしようと思ひ、なかなか言うことができませんでした。ですがある日、信用している二人に、つい、女の子が好きだと言ってしまったのです。その二人は一度黙って、こう言ったのです。

「違う違う、私達が聞いているのは恋愛的に好きな方で、友達的に好きな方じゃないよ。」

二人にそう言われた瞬間、頭が沢山のはてなでうまりました。「え、いや冗談じゃないんだけど。」そう言えたのは頭の中だけで、実際に出た言葉は

「ごめんごめん、間違えちゃった。」

でした。こうやって言っていくうちに、嘘をつくことが上手くなっていくような気がしました。私はその後、二人の顔色を伺いながら話をしたため、結局私の本当の気持ちが出たのは、その日は最初の一言だけでした。幼い私があの時感じたものが恋なのかさだかではないのですが、男の子と同じように心は動きました。急にカミングアウトをしてみましたけれど、私はあの時に一体どう思っただろうと考えました。もちろん否定はされたくないけれど「私は偏見ないからね」と言っただけでもなかつたのです。ただただ当たり前のように「そうなんだ」とか、異性を好きになった時と同じように「どういうところで好きになったの」とかを言っただけでした。

今、思うことは、人を好きになることは何も特別なことではない、ということ。受けとる側に理解があるかが重要なのだと思います。「好きな人」を質問することは簡単ですが、受けとめることが案外難しいのです。だからこそ、言うのをためらっている人がいたら無理やり励ましの言葉をおくるのではなくて、そつと気づかれない程度に、支えてあげるのが良いと思います。特別ではないよ、それはきつと普通のことだと伝えたら、その子の笑顔に繋がるはず。皆の好きな人や物がそれぞれ違うように、違って当たり前だと理解して、それが普通だと言えたい社会にしていきたいです。素直な気持ちや、やりたいことを当たり前のように言える日がくるように、相手の気持ちを尊重し合える人が増えて、「普通だよ」と笑いあえたらいいなと思えました。



優秀賞

## 『話す』こと

横浜市立大綱中学校 二年

菊池優羽

「どうしてそんな話し方なの？」

いところからかけられた、なにげない一言を十年近くたった今でもおぼえている。

私は三歳のとき、吃音という病を持っていた。吃音は、簡単にいうと、うまく話せない病気だ。言いたい、言うべき言葉は見つかっていないのに、それが言葉にできない。しかし吃音の本当に辛いところは別にある。それは障がいと認められないところだ。健常者とは確かに違うのに、健常者と同じスタートラインに立たなければならぬのだ。だから、心無い言葉を何度もかけられた。私はそんな言葉に何度も悩まされ、一度だけ母に相談したことがあった。すると母は、

「コミュニケーションなんて、相手に意思が伝わればいいんじゃないかな。」

と言った。はっとした。私は、家で自分の話し方について意識したことはなかった。それは、家族が私の話し方までを受け入れてくれていたからだ。私のまわりにいる人たちはすごく優しい。もちろんそうじゃない人もいる。でも、まちがいに優しく人たちはいるんだ。その人たちは、私のことを本当には理解できないかもしれない。だけど、それでも、その優しさを無駄にしたくない、と思った。それに気づいたときから、私は辛く

なったとき、いつもある言葉を思い出していった。

「大丈夫、家族がいるから大丈夫。」

この言葉が魔法のように、私を励ましてくれた。

それから、十年近くがたち、私は十三歳になった。今、私は自分のコンプレックスであったはずの記憶について話している。吃音は恐ろしいものだ、と今でも思う。自分は人と違う、そう意識した瞬間にぐんと治りにくくなるのだ。私は、吃音だからといって特別になにかを頑張る必要はないと思う。吃音は、なにかを頑張つて治るほど簡単なものではないから。我慢しなきゃいけない、なんて考える必要もない。本当に辛いときは、逃げたつていいと思う。私はいままで、たくさん逃げてきた。それでも、いろいろなことに挑戦してきたのは、吃音に関係なく、私を支えてくれた人たちがいたからだ。その人たちのために、いくら笑われ、バカにされても声を出し続けてきた。今では、そんな辛い経験をのりこえた自分を誇りに思う。そんな経験をしたからこそ、すぐにはめげない、強い子になれたのだと思う。

今までの人生で、大切なことを学んだ。それは、『話す』という行為は素晴らしい、ということだ。人にとって言葉はすごく大事なものであり、言葉には人を変える力があると思うから。大切な人を救う力があると思うから。手紙やメールにはないものを持つているはずだから。それを嫌いになるとするのは、すごくもったいないことだと思う。だからこそ、誰でも発言でき、それが反映される世界を作ることが大切だと思う。

「私は話すことが大好きだ。」

そう、誰もが言える世界にしていきたい。



優秀賞

## 笑顔

横浜市立日吉台中学校 三年

喜多優妃

「一人ひとりがかけがえのない人間として尊重され、幸せに生きる権利」

幸せの象徴は笑顔であると私は思っています。そう私に思わせてくれた私の弟についての話しをします。

私の弟は軽度の発達障害があります。そのことがわかったのは弟が小学二年生のときでした。他の人より勉強ができない、約束したことも覚えていない彼を家族も、先生も、私も、ただ勉強が苦手なだけ、集中力がなただけだと信じ込み、まさか障害があるとはそれまで思いもしませんでした。

「どうしてこんなことも出来ないんだ。」当時の弟にとつととても辛い言葉です。そして、私が弟が失敗するたびに言った言葉でもあります。

周りの大人達が発達障害ではないかと疑い始めてやっとわかった本当の弟。「障害」というものが元々身近にあった私はそのとき、驚きよりも姉としての未熟さに落胆し、これから心を入れ換えて優しくしようと努力しました。もう「どうしてできないの。」なんて言わない、勉強も一から十まで全部教えてあげる。障害が身近にあっても発達障害について何もわからない私が導き出した答えでした。私と同じ立場だったらきっと多くの人が同じ答えを出したはずです。

ですが、母は違いました。今まで通り「自分でできることは自分でしなさい。」と弟に言ったのです。

衝撃的な言葉でした。初めはその真意を理解できずに「母は弟を理解していないのか。」と母を疑いました。しかし、母はそんな人ではありません。だからこそ余計に疑問に思いました。この疑問を解決するため、テレビや記事でたくさんの方の考え方にふれてみました。考えてみました。そうしてやっと気づけたことがあります。それは、障害がある人はなにもできないのではないということです。

私はハッとしました。もし、「自分でできることは自分でする」ことをさせず周りの人がすべてをやってしまったら、それこそ本当にその人はなにもできなくなる、なにもしなくなるのです。私の母はこのことをわかっていました。

また、私は自分に落胆しました。弟のなにをわかっているつもりになっていたのだろうか。「障害があるから私が全部やってあげよう。」という考えは遠まわしに弟をなにもできないやつだとけなしているようなものだ。

けれど、弟はそんな私に変わらない笑顔を見せてくれます。小さかった弟の身長はぐんぐんのびて、声もどんどん低くなって、でもその笑顔はどこも変わることはありません。その笑顔は私を、皆を笑顔にできる魔法です。その魔法に私は何度救われたでしょう。

笑顔は魔法。生まれつき目の見えない人も他の人と同じような笑顔をしています。

確かに障害のある人は健常者と全く同じではありません。けれど全く違うわけでもありません。どんな人も楽しいときは楽しいと思ひ、悲しいときは悲しく思ひます。だから、「障害者だから。」と差別をしたり、自分を否定的に思う世界は嫌です。

私は二度も間違ってしまった。きつとこれからも正解はできないと思います。間違ってしまった後悔もきえたりはしません。

ですが、私達が進むことができるのは前だけです。どんなに後悔しても時間は刻々と過ぎます。今までの自分の行動も愛すべき自分自身だから失敗も受け入れ、これからをどう生きるか考えるべきだと思います。私は、まだまだ試行錯誤の日々で時には暗く思いつめてしまうことがあります。

だけれども私は、できる限りの人々が私の弟みたいに笑顔で生きてほしいという事を一貫して言い続けま  
す。誰かを傷つけて得た幸福感はうその幸せです。差別はする側もされる側も本当の幸せを得られないので  
す。

障害者や健常者、当事者や部外者関係なく「一人ひとりがかけがえのない人間として尊重され、幸せに生きる権利」のある今を守り、ただ権利があるだけではない、本当に幸せに生きることができる社会を手と手をと  
りあいともに作っていききたいです。





優秀賞

## 声の形

横浜市立あざみ野中学校 三年

根<sup>こん</sup> 田<sup>だ</sup> 絃<sup>いと</sup> 花<sup>は</sup>

私はよく、『声が高い』と言われる。別にこの事で嫌な思いをした、とかいうのは全くなくて、むしろ私の所属する合唱部では、『響きが良い。』

それでも、『私の声ももう少し低かったら良かったのに。』と思う時がある。∴ッカケルッに会う時だ。

ッカケルッは私の五番目のいとこに当たる男の子で、くりつとした目が可愛い五才だ。五才だけれど、私はッカケルッが文を話しているのを、聞いたことがない。私が最後に、ッカケルッが話すのを聞いたのは、ッカケルッが四才の時のたった一言「あいあい」<sup>バイバイ</sup>だけだ。

もうなんとなく分かるかもしれないが∴ッカケルッは耳が聴こえない。正確には、右耳は聴こえないが、左耳は補聴器をつけばなんとか、といった具合だ。だからッカケルッの父親（私の叔父に当たる）がッカケルッに話しかけるとときには、必ずッカケルッの左耳の横で話す。ッカケルッは父親の、バスほどの低音であれば聞こえるので、ッカケルッにも反応がある。

けれど、ッカケルッは、私の「声」を、聞き取る事ができない。私は親戚の子供の中で一番上であるから、お正月やお盆には下の子達の食事の世話や、寝かしつけが仕事になっている。一人と話しながら、別の一人を寝

かしつける、なんていうのもザラである。ただ、そういう時、どうしても「声で」カケルを呼ばなければならぬ事がある。でも、私の声は、カケルに届かない。その瞬間、私は無性に悲しくなる。どうしたらカケルに私の「声」が届けられるのだろうか。カケルに私の事を、もつと知ってほしいのに。

カケルの事も、もつと知りたいのに。

そう思っていたある日、母が、『私が柄にもなく悩んでいるようだから』と、話を聞いてくれた。私は正直に話した。カケルの考えていることが分からなくて困っていることや、カケルに私がすっかり認識されているのか不安なこと…。すると母は、そんなこと、と笑って、私に、「カケルのことをよく見ていなさい。きつとあなたが思っているより、あなたはカケルに愛されているから。」と言った。そこで私は一日中カケルのことを気にかけてながら過ごした。すると、カケルは本当に、私の事を好いてくれていると感じた。私が座っていれば自然と隣に座るしカケルがペットボルのキャップを開けられない時、私のところに持ってきてくれる、とか。私自身も気づかなかった、そんなささいな事も、本当に嬉しかった。

声がなくても、言葉がなくても、伝わる気持ちがあると知れた。『言葉にしなきゃ分からない』なんて何かのドラマでやっていただけで、そんなことない、と思う。確かに言葉にしなければ伝わらないこともあるけれども、私はカケルに『気持ちを伝える』ことの本当の意味を教えてもらった気がする。人と人の間で、気持ちを通じあい、温かな気持ちになる…。その一瞬が、とても大切で価値のあるものだと思った。



## 優秀賞

### 「知らない。」ということ

横浜市立生麦中学校 二年

佐<sup>さ</sup>伯<sup>えき</sup> 凜<sup>りん</sup>

「知らなかった」と「知ろうとしなかった」では、私は大きく違うと思う。

「知らなかった。ごめんね。」

というと、全てが許される様な雰囲気は私は嫌いだ。そんな私が出会った言葉がある。

「愛の反対は憎しみではない。無関心だ。」

という言葉だった。ノーベル平和賞受賞者エリ・ヴィーゼルの言葉である。エリ・ヴィーゼルがノーベル平和賞を受賞したのは一九八六年、今から三十五年前である。そこから世の中はどう変わっただろうか。スマホを開けば、情報が溢れている。知りたいと思えば簡単に知ることができるようになったと思う。しかし先日、横断歩道で皆がスマホを見ながら渡るのを見て、「危ない」と思った。その様子はまるで周囲どころか自分の身の危険さえ無関心に見えた。

そして私は母に、最近自分の感じている周囲で感じる無関心の事を話してみた。すると母は、「かっちゃん」の話をしてくれた。かっちゃんは、母の姉で、脳に生まれつき重い障害があった。どれだけ歳をとっても一歳半の子程度の語彙や生活だったという。かっちゃんは私が生まれる前に亡くなってしまったので、私が会

えるのは祖父母の家に遊びに行った時だ。まず笑顔のかっちゃんの写真に手を合わせる。すると、

「かっちゃん、凜ちゃんと知晃君が来てくれたよ。」

と祖母が言う。私も心の中でいつも「来たよ。」と話しかける。一度会ってみたかっちゃんと思う。母はそんなかっちゃんと子供の頃一緒にスーパーに行く時、当時は今よりもっと周囲の理解がなく、言葉にならない言葉を出したりするかっちゃんを大げさに避けるようにしたり、「見てはいけない。」と母親が子供に話したという。親戚の人に、かっちゃんのような兄弟がいる事は人に話さないようにと言われたこともあったそうだ。私はその話を聞いて「ひどい」と腹を立てた。母も子供の頃、嫌な気持ちになり私と同じ様に祖母に訴えたそうだ。そうしたら祖母は、

「皆、かっちゃんが良い子だっことを知らないからね。」

と答えたという。母はその言葉を聞いて、社会の人にもっと知ってもらいたいと思うようになった。そして母は社会福祉士になった。社会の人に弱い立場の人達の事を知ってもらいたいと働き始めた母だったが、その中でもう一つ知らせなければならぬ人がいると強く感じたという。それは、弱い立場にいる人達自身が幸せを目指しても良いという事を知らずにいる、考えずにいるというのだ。母の役割はそんな人達が出来る力を使って自分らしく生活を送るお手伝いだった。私は

「すごいね…。」

と言った。母を尊敬する気持ちからと、今の自分はそんな母のようには出来ないという気持ちからだ。すると母は、

「何もすごいくないよ。」

と言った。それは、母一人で出来る事なんて何もなく、色々な専門家の方や周りの人達とチームになって進めると言うことを教えてくれた。

私はその話を聞いて、社会で起きるさまざまな問題は今いる私達一人ひとりがチームになって解決していくことなんだと感じた。そして最初「自分には出来ない」とした自分は、どこか「知ろうとしない」人だったのではないかと思った。そうした一人ひとりの心を閉ざすという積み重ねが「知らなかった。ごめんね。」という悪気のない無関心を生み出しているのではないかと思った。

人権とは、私達一人ひとりが幸せになる権利だ。このとてもシンプルなことが守られない場面や環境が沢山ある。どうかそんな時、無意識に心を閉じない自分でありたい。社会の一員として、知ること、自分の出来ることを探せる自分でありたい。そして、沢山の人達と手をとりあい、しっかりと前を向いて勇気ある一歩を踏み出したい。



優 秀 賞

## 共に生きる

横浜市立仲尾台中学校 三年

嶋<sup>しま</sup> 本<sup>もと</sup> 咲<sup>は</sup> 花<sup>な</sup>

「あなたの夢は何ですか？」唐突に笑顔で聞かれた。少し驚きながらも私は「将来の夢」のことかと思いい、「看護師です。」と答えた。ともさんと初めて会話をした内容だ。ともさんは左半身マヒ、話すことができないが皆と同じように生活はできる。一人で買い物もでき、刺繍もできる。私は一人で買い物に行くのはドキドキするし、刺繍は全くできない。

母は障害者施設で働いている。夏休み中、母から頼まれごとをして、施設に顔を出した。母に会う前に電動車イスのつた女性が笑顔で近づいてきて「あなたの夢はなんですか？」と、お手製のひらがな表を指さしながら聞かれた。彼女の夢は「一人暮らしをすること」だそう。理由を聞くとグループホームには門限があるため夜の外出ができないそう。友達と夕飯を食べに行ったり、時間に縛られることなく映画も見たいと言った。その後少し会話をし、母の頼まれごとが終わったので帰宅した。帰り道、なぜ一人暮らしができないのか考えた。母が夕飯の支度中、ため息をついていた。ともさんの話だった。携帯電話が壊れてしまい新しいものを買うに買い替えたそう。しかし、使いやすいケースがなく困っていたのだそう。インターネットで検索するとたくさんあったので提案するが、グループホームではインターネットでの買い物は許されていないそう。私

はとても疑問に思った。確かにグループホームは共同生活なので勝手な行動をしたり、約束事は守らなければいけないが、そこで暮らしているならばより良い生活を送りたいと思うはずだ。ともさんの一人暮らしがしたい理由が少し分かった気がする。きつと「自由」がほしいのではないかと思った。しかしなぜ、一人暮らしをしないのか。それはともさん自身に不安があるからだ。基本的なことは一人でできるが何か思わぬトラブルが起きたとき対処できるサポートがないからかもしれない。私は障害の有無に関わらずもし隣人や困っている人がいたら私に出来ることをすると思うが、皆が皆そうではないという現実。難しい現実かもしれないが一人一人が少しでも他人のことを気にして生活していけば障害者の方も、もつと自由に生きられる世の中になると思う。

そしてともさんとは今ではとても仲が良い。好きなアイドルの話をしたり、冗談を言いあつたりしていつも笑っている。また、トイレの手助けをする代わりに刺繍を教わる。

人権とはすべての人々が生命を確保しそれぞれの幸福を追求する権利とあります。この人権は障害の有無は関係ありません。健常者が助けるといふ考えではなく、安心して暮らしていけるようにはどうしたら良いかという意見を障害者の方から聞き、共に生きることが大切だと思う。何もすることはできないけれど、ともさんとずっと友だちなのはこの先も変わらない。



優 秀 賞

## 思いやりの想像力

横浜市立鶴ヶ峯中学校 一年

新<sup>しん</sup>庄<sup>じょう</sup>理<sup>り</sup>咲<sup>さ</sup>

私には、八十三歳の祖父がいる。緑豊かな武蔵野台地の南西部で、祖母とふたりで暮らしている。天気の良い日には、祖父は杖をつけて散歩に出掛ける。公園で友人と話したり、図書館で本を読むことが大好きだ。

一見すると、祖父は杖をついた一人のおじいちゃんだ。しかし、他のおじいちゃんとは違う。なぜならば、封人体筋炎という難病を抱えているからだ。封人体筋炎とは、全身の筋力がどんどん低下していく進行性の難病だ。難病という名のとおおり、薬での治療法は無い。地道なりハビリテーションを重ねて、進行を抑えるしかない。

私は、祖父の家に遊びに行くと、必ず家族でカラオケに行く。祖父の隣を歩いていて、毎回感じることもある。

一つ目は、自転車がスピードを出して近くを通り過ぎていくことだ。前から来ることもあれば、追い越しざまに急に現れることもある。ゆっくりと慎重に歩を進める祖父にとっては、恐怖でしかない。驚いて倒れてしまわないよう、また、急いでよけることができないため、祖父はその場で立ち止まる。そんな祖父を守るために、私や家族も団子になって立ち止まる。「こっちにぶつかって来ないで!!」そんなオーラを発しながら……。



二つ目は、すれ違う人の多くがスマートフォンを見ながら歩いていることだ。ぶつかってくることもそないが、ギリギリのところまでよけて行ってしまふ。祖父と私が、ぶつかられないよう立ち止まっていることにも気がつかずに……。歩道であればまだしも、横断歩道では、ただでさえ時間内に渡り切ることが困難なので、この数秒が命取りになってしまうだろう。

三つ目は、交通量の多い横断歩道での出来事だ。横断歩道を渡っている時、勢いをつけて曲がってきた車が横断歩道ギリギリのところまで待っていることがある。祖父は、出来るだけ早く渡らなければ迷惑になると思い、急いでいるのだが、私は側で見守りながら、車の中の人の表情がイライラしていることに気がついた。にらみ返したい気持ちでいっぱいだったが、平静を装い、毅然としてゆっくり横断歩道を渡りきった。

私は、祖父との経験を通じて、自分一人で行動していたら気がつけなかったことに気がつくことができた。立ち上がるという動作に数分かかること、車道から歩道へのたった数センチの段差も大きな段差であること、私たちが普通にすれ違うスピードがとても速く恐怖に感じることがあること、転倒してしまったら一人では起き上がれないこと、などを……。

人は、自分がその人の体になってみないと分からないことが、たくさんある。しかし、相手の立場になって考えること、思いやることはできる。「前からおじいちゃんが来たから自転車を減速しよう」「道で立ち止まっている人がいるけれど、どうしたのかな？」などの思いやりの気持ちで世の中を見渡そうと思う。そして、その思いやりを行動に移すことが、誰もが安全・安心に暮らせる世の中に繋がると、私は強く思う。



優  
秀  
賞

## 可能性

横浜市立秋葉中学校 一年

日向野 楽々  
ひがのの  
ら  
ら

突然ですが、障がいって何でしょうか。そして障がいのある人に対してみなさんはどんなことを考えますか。私が今回伝えたいことは、障がいがあっても、できることはあるということです。障がいがあるから、障がい者だからといって、なにもできないと決めつけることは、その人の可能性を否定していることと同じだと思います。そして、私がこのテーマを選んだ理由は、私の妹は障がいがあるからです。私の妹は四肢麻痺で、幼い頃から首から下が動きません。そのため、もちろんできないことも多いです。ですが、肩・口・顎など、動かせる所を使って日々色々なことにチャレンジしています。妹は、口でマウススティックというタッチペンのようなものをくわえて絵をかいています。日に日に上達していて、驚いています。実際にそれで私が絵をかいても、そんなに器用にかくことができません。他にも、マウススティックを使ってピアノを弾いたり、スイッチのジョイコンを操作することもできます。また、ジョイスティックというものを額で操作し、先ほどのように、絵を描いたり、ゲームをしたりすることができます。そして、今もお感染が拡大しているコロナウイルスは、やはり妹にとって、私達にとっても、恐ろしい存在です。ですが、このご時世だからこそオンラインでの活動が増え、妹の活動の幅が広がっています。オンラインポツチャ大会に出場した

り、画面の向こうのみんなと協力して音をかなでたり、今まですることがあまりできていなかったコミュニケーションを、様々な場面でとることができ、それが妹の世界を広げています。コロナウイルスでできないことも多いけれど、他にできることを精一杯頑張っている妹の姿を私は尊敬しています。そして、そういう体験を妹にさせてあげようというお母さんの強い気持ちも私は心から尊敬しています。というように、障がいがあってもできることはたくさんあると思います。とはいえ、私も、このような環境で生まれ育ったからこそ、こういった世界を知ることができて、別の視点から考えることができるだけで、もし、また違った人生を歩んでいたら考え方が変わっていたかもしれません。そこをふまえた上で、私が考えたことは、さらに多くの方に障がい者の可能性について知ってもらうことです。それによって、障がいがあるからなにもできない、そういうのがい念がなくなっしてほしいと思います。そして、これまで話したことは、私たちにも同じことがいえるのではないのでしょうか。○○はくだからできない。とか○○ができる訳がない。そういう発言は、相手の可能性を完全否定していて、勝手に自分の考えを相手におしつけていることになります。もつと相手に寄りそって考えれば、きつと相手ができることがみつかるはず。いってしまえば、つまり可能性は無量大ということです。妹の姿をみていると、やればできると本当なんだ。そう思わせてくれます。そんな妹をこれからも応援していきたいし、私も負けなくらい色んなことにチャレンジしていきたいです。よくケンカするし、わがままな妹だけど、私の自慢の妹です。



優 秀 賞

## 違ってみえた横浜駅

横浜市立田奈中学校 二年

福<sup>ひく</sup>田<sup>だ</sup>莉<sup>り</sup>子<sup>こ</sup>

私は毎週日曜日にJ R横浜駅の近くにある学習塾に通っています。横浜駅は多くの人が利用する大きな駅です。この駅はデパートとつながっているのです、日曜日でも大変混雑します。そんな横浜駅で私はある出来事を目にしました。

電車を降りて階段を使い、改札へ向かう人混みのなか、白杖を手にした一人の男性が、「点字ブロックの上はあるかないで」と怒った口調で言ったのです。その男性は電車に乗るために、点字ブロックをたどりながら階段に向かっていました。私は、改札へ向かう人混みのなかにいたのですが、無意識に点字ブロックの上を歩いてしまっていました。

人混みが一通り去ったところで点字ブロック、階段、そして改札の位置関係を見てみたところ、私はあることに気がつきました。それは、多くの人が階段から改札に向かう通路に対してほぼ垂直に交わるように点字ブロックが設置されていたということです。つまり、私たちは電車を降りて改札に向かう際、点字ブロックを避けて通ることができないのです。また、この駅ではよく、「点字ブロックは目の不自由な方の大切な道しるべです。点字ブロックの上に物を置いたり、立ち止まったりしないでください。」というアナウンスが流れてい

ます。しかし、点字ブロックの上に物を置いたり、点字ブロックの上で立ち止まったりすること以前に、その上を通らなければ目的地に行くことができないという状況に対して私は不満をいだきました。点字ブロックは本来、目の不自由な方の大切な道しるべであるはずなのに、むしろ、それを使うことによって目の不自由な方は人混みという危険にさらされているのではないのでしょうか。目の不自由な方の人権が侵されているのではないのでしょうか。

そこで、私は目の不自由な方が歩いていないことを確認しながら、点字ブロックの上を実際に歩いてみました。人混みのなかでは一体、どれだけの距離を進むことができるのでしょうか。二〇二一年六月二十七日、日曜日午後〇時三十四分に歩いてみると、人にぶつからずに進むことができましたのは、たったの二歩で、点字ブロック三ます分でした。私が白杖を持っていないため、健常者だということが相手である人混みに認識されていたからかもしれません、それでも歩くことができたのは二歩でした。これでは、目の不自由な方は安心して点字ブロックを利用することができないと私は思いました。

考えてみると、目の不自由な方が安心して歩けるようにするためには、「ゆっくり歩ける通路」が必要だと思います。この通路は、目の不自由な方に限らず、身体の不自由な方や高齢の方、子ども連れの方なども利用できるようにすれば、よりよいと考えます。だから、私は電車でいうと優先席のように、駅構内にもゆっくり歩ける優先通路を設置することを提案します。その通路のなかに、目の不自由な方の道しるべとなる点字ブロックを設ければ、目の不自由な方は安心して歩くことができるようになるのではないのでしょうか。

そして、横浜駅が目の不自由な方をはじめ、ゆっくり歩く方にとって安心して歩ける駅になるまで、私は困っている人に声をかけるなどして積極的に手をさしのべていきたいです。



優 秀 賞

## 一時の方向のエビフライ

横浜市立六角橋中学校 二年

松<sup>まつ</sup>本<sup>もと</sup>ひなた

私には、目の見えないところがいます。高校二年生で私と三つ年のはなれた女の子です。私が物心ついた頃には、いとこはほぼ全盲で私の顔も幼い頃の記憶がぼんやりとある程度だと言っていました。毎年、正月に父方の祖父の家で会う程度で、私は「目が見えないって大変そうだなあ。」ぐらいにしか認識していませんでした。しかし、ある出来事を境に私のいとこに対しての認識は大きく変化したのです。

きっかけは、私が小学六年生、いとこが中学校三年生のときでした。いとこも私も、母と妹を連れて食事に行きました。いとこの注文したメニューが届いた時の伯母といとこのやりとりが、私にはとても衝撃的に思えたのです。

「真ん中にハンバーグがあつて、十時の方向に人參とグリーンピースがあるから。あと、一時の方向にエビフライがあるよ。」

「エビフライ？やったあ！食べるの久し振りな気がするなあ。」

きっと、二人にとってはなんでもない会話だったのでしよう。しかし、私にはそれがとんでもなくおもしろいと感じたのです。一時の方向にエビフライがある。思わず、時計を探して一時の方向を見てしまいました

か。私はそんなワクワクとした気持ちになったのです。後から聞いた話ですが、いとこと伯母は食事をするとき、いつもああやって時計の方角を使い、どこに何の食べ物があるかを確認しているそうです。そこで私は大きな問題に気付きました。それは、いとこは誰かがいないと好きな食べ物が、好きなときに食べられないということです。

みなさんには、もちろん嫌いだったり苦手だったりする食べ物がありますよね。反対に好きな食べ物もあると思います。そんな中で、「嫌いなものは食べたくない。」「好きなものは一番最後に残しておきたい。」などと考える人は少なくないと思います。しかし、目が見えないとなるとそうは簡単にいきません。おそろおそろフオークや箸の感触だけを頼りに食べるしかありません。口に入れるまで分からない、まさに闇鍋状態です。そんなんじゃ、きつと食事が楽しいものではなくなってしまうです。目の見える私達にとつては、ほんの些細な問題かもしれませんが。しかし、視覚が使えない人達にとつては毎日必要な食事というのも、楽しいものではなくただの作業となってしまうかもしれません。そう考えれば大きな問題だと思いませんか。確かに今はバリアフリー化も進んでいます。完全に障害者と非障害者の壁がなくなつたとは言えません。完全に無くすことは難しいと思いますが、今の社会でももう少し壁をなくすことはできると思います。例えば、飲食店のメニューに点字をつける。プレートメニューの場合、何時の方向に何をおくかを決める、などと少し工夫しただけで便利になると思いませんか。障害者をひいきするのではなく、障害者でも楽しめる社会。誰もが平等な社会を作るには一人ひとりが力や知恵を貸し合い、誰もが他人のことを思いやれる。社会全体でその動きがあれば、きつと実現できると思います。

そして、その社会を作っていくのは私達です。誰もが平等な社会を実現する為に、まずは自分の周りから。

「大丈夫？」その言葉だけで何かが大きく変わるかもしれませんが。誰も手が取り合える社会の為、一歩ずつ着実に歩んでいきたい。私がそう思えたのは一時の方向にあったエビフライのお陰です。みなさんも、小さな事からでも想像をふくらませてみてください。きっとそれが、よりよい社会を作る為に繋がっていくんだと、私は思います。





優 秀 賞

## お互い認め合う

横浜市立富岡中学校 二年

森<sup>もり</sup> 遥<sup>はる</sup> 希<sup>き</sup>

「学校なんか行きたくない。」と言って私は学校に行かなくなりました。それは、中学一年生のときでした。私は他人の話し声や視線、敏感に反応してしまいます。友達と話す事は好きだけど、親しくない人と接する事は苦手です。

中学に入学して、緊張もあつて最初は静かな教室でした。最初は友達とおしゃべりできて楽しかったけれど夏休み前には静かな教室から、騒しい教室に変わっていました。自分は「うるさい」と思っていたけれどクラスの皆は、笑って楽しそうだったので、きつと明るいクラスとしか思っていないだろうから、私が「うるさい」なんて言ったら面倒な事になると思い何も言えずに過ごしていました。

夏休みがあけても現状は変わりませんでした。むしろ悪化してますます騒しく感じて人の視線も気になるようになりました。「何か変だな」と思うようになりました。ある月曜日。とうとう私はたえれなくなり、親に向って「行きたくない。行ったら楽しくない。」と言って休みました。そしてどんどん「学校」と言う言葉を聞くだけで苦痛になり授業も宿題も手がつかず休む回数も増えて、完全に行かなくなりました。

学校を休んで一カ月が過ぎて、祖父から「病院に行つて先生と話してみたら。」と言われました。思ってい

る事を吐き出したかったので行く事にしました。結果頭のモヤモヤが全てではないけれど取れてスッキリした感じがしました。そしてお医者さんと話して思った事は、「自分のペースで良い」と言う事です。「無理に他人に合わせたり自分をせめても良い気持ちにならないと思うよ。」「嫌なものは嫌と言って良んだよ。」と先生に言われて、少し前向きになりました。でもやっぱり「学校」と言う言葉は苦手でした。

ある日、家の前にいたら、学校のジャージを着た人が、こちらに向かって歩いて来るのが見えました。隠れようとしたその時歩いて来る人が小さく手を振りました。目を少し細めて見ると私の友達だったのです。私は走って友達の所に行きました。久しぶりに会ったので少しだけ話しをしようと思ったのですが、一時間くらいたっていて驚きと楽しさがあつて最後言葉が出なくて苦笑いをして友達の顔を見ると、友達が泣いていたので私は「何で泣くの。」と聞くと、「だって嬉しいんだもん」と言われました。私は、友達が泣くほど心配しているとは思いませんでした。「こんなに心配してくれる友達がいるんだ。」と思つたら気持ちがマイナスからプラスになりました。

それから時々クラスや部活の友達が会いに来てくれました。私は、少しずつ前向きな気持ちになりました。でも、クラスの皆にどう思われるのか視線を向けられることが怖かったし、なぜ学校に来なかったのか聞かれるのも怖かったです。友達にその事を相談すると、友達が理解してくれて、クラスの皆も協力してくれました。私が教室に入りやすい雰囲気にしてくれました。私は特別学級に行きつつ教室に顔を出し、皆と一緒に過ごす時間を増やしていきました。クラスはいつも通りちょっと騒しいけど、普段通りに接してくれた事にありがたかったです。学年末の遠足は今では行って良かったなと思います。私にとってこのクラスは、騒しくてちょっと苦手な所もあるけれど私を受け入れてくれた優しさのあるクラスだなと思います。

私は、この経験から思った事は、自分と性格が違う人を受け入れて認めてあげる事が、大切だと言う事です。周りの人と自分は違うんだと悩む事が有るけれど、自分も相手もそれを認め合って、どうしたらお互いに歩み寄る事ができるのか常に考える事が一番大切だと思います。



優 秀 賞

## 誰もが同じ人間

横浜市立中和田中学校 三年

山<sup>やま</sup>村<sup>むら</sup>実<sup>み</sup>結<sup>ゆ</sup>

私が通っていた小学校には特別支援学級がありました。学校ではその学級を三・四組と呼んでいました。私には、その学級に友だちがいました。その子は話し方が少しおっとりとしている女の子でした。優しい雰囲気を持っていて、私はすぐに仲良くなりたいたいと思いました。

高学年になってその子は三・四組だけではなく、私と同じクラスで過ごす時間が増えていきました。その子いわく、先生に普通クラスで過ごす時間を増やしても大丈夫そうだよと言われたらしく、私はうれしくなっていました。「よかったね。」と言いました。そうするとその子は「うーん、どうだろう…。」と微妙な返事をして苦笑いをしました。そのときの私には、なぜその子がそんな返事をしたのかよく分かりませんでした。でもすぐにその答えが分かるような出来事がありました。ある日、私のクラスで席替えがありました。その時三・四組の友だちととなりの席になった男の子がこう言いました。

「うわ、最悪。」

たった一言。普通の男の子の、たった一言でこんなに人を傷つけることがあるのだと、私ははじめて知りました。私の友だちを見る男の子の目やみんなの目はまるで、人間じゃないといっているように見えました。で

も、三・四組の子はもうしわけなさそうに席へ座るだけでした。私はあの男の子に恐くて何も言えませんでした。その後私はその子とかわらず接するようになりました。できるだけその子が傷つかないようにしようと思っていました。そうしているうちに、先生や大人はみんな「私を」ほめるようになりました。えらいね、ありがとうと言われました。いつもはうれいしいその言葉も、その時はうれいしく思えませんでした。ほめるなら、笑いながらひたすらこの日常に耐えているあの子をほめてほしかったと思いました。そこで私は気がつきました。大人も子どももみんな、三・四組の人たちなどの障がいのある人たちを悪い意味で特別扱いすることを普通のことだと思っていること。そして障がいのある人たちと普通に接して、悪い意味での特別扱いをしないことを特別なこと、めずらしいことだと思っているということに。

私はどうすればみんなが障がい者への考えを変えられるだろうと思いました。そしてネットである記事を見つめました。そこにはある障がい者の方の言葉が書いてありました。そこには「差別をなくして」という言葉もたくさん書かれていました。ですがそれよりも私が印象に残ったのは、「誰もが同じ楽しみや悩みを持つ人間である、自然に素直に分かってもらいたい」という願いでした。私はその言葉を見て驚きました。なぜなら、同じ人間であることなんて当たり前なこと、そんな単純なことだったのかと思ったからです。でもその単純なことが一番大切なんだなと思いました。

私はみんなが障がい者への考えを変えるためには二つのことが重要だと思いました。一つ目は障がい者の方々の気持ちを知らうとすることです。たとえばネットや本で障がい者差別について調べたりすることが大切だと思えます。一人一人がこの問題について知っているだけで差別はとて少なくなると思えます。二つ目は、誰もが自分と同じさまざまな感情を持つ人間だと理解することです。当たり前すぎて忘れがちなことです

が、改めて考えてみて、自分の行動を変えていくことが大切だと思います。私はこの人権作文を書くことで差別についてたくさんを知れました。今回知ったことを他の人に伝えていけるようになりたいです。そして三・四組だったあの子も生きやすい世の中になったらいいと思います。



優秀賞

## 無知

横浜市立南瀬谷中学校 三年

吉<sup>よし</sup>田<sup>だ</sup>涼<sup>すず</sup>夏<sup>な</sup>

私は三歳から小学校卒業まで、父の仕事の都合で中国に住んでいました。「中国」と聞いて悪いイメージが浮かぶ人は少なからずいるかもしれませんが。

これは、実際に私が体験したことです。中学一年生の時、友達にどこの小学校に行っていたのか聞かれました。私が中国にいたということを伝えると、このようなことを言われました。「すごいね。でも私、中国人って声が大きくて怖いし、いいイメージないな。日本に戻ってこれてよかったね。」この時は笑って軽く受け流しましたが、この言葉は私の頭に残り続けました。だんだん自分の中に後悔と自分への怒りがわいてきました。「どうしてあの時すぐに否定できなかったのだろう。友達の間で誤解をとりあげられなかったのだろうか。」しばらくこのことで頭がいっぱいでした。

中国人は、優しい人が多いです。バスに乗ったとき、小さかった私はたくさんの人に席をゆずっていただきました。笑顔で話しかけてくれたことも何度もあります。人見知りで自分から人に話しかけることが苦手だった私は、中国人のこのような性格が大好きでした。また、これはあまり日本人の間で知られていないと思いますが、日本のことが好きな中国人はたくさんいます。母と日本語で話していたときに声をかけられたことが多

くあります。うれしそうに笑顔で知っている日本語を覚えてくれたのが印象に残っています。友達の言っていた中国人の大きな声も、怒っているわけではなく、相手が聞こえやすいようにという優しさからきているのです。

友達があのようなことを言ったのは、きっと中国人のことを全然「知らなかった」からだと思います。実は私も、中国にきたばかりのころは、中国にあまり良いイメージをもっていませんでした。しかし、中国のことをよく「知った」ことで中国への悪いイメージは消えました。このような経験を通して、私は無知のおそろしさを知りました。相手のことをよく知らずに、想像だけで自分勝手につくってしまったイメージによって差別がうまれてしまいます。これは絶対あつてはならないことだと思えます。相手のことをよく知り、理解することとはよりよい未来のために必要なことです。また、相手の悪いところを見るのではなく、良いところをたくさんみつけることも差別をなくするための大きな一歩となるでしょう。

私は、あの時の友達からの言葉を否定できなかった悔しい気持ちを含めて覚えています。あのことがあつてから、私は誰かにあの時のようなことを言われたら、しっかり否定するようにしています。そして、今までに自分が体験してきた中国人のよいところ伝えていきます。それを聞いた人は、最初はおどろきますが、「そうだったんだ。知らなかった。もつと聞かせてほしい。」と言ってきてくれます。これを聞くたび、私は胸がいつぱいになります。色々な人が共存するこの世界を、よりよいものにするために、色々なものの良いところを知り、共有していきたいと思えました。





〔緑区〕

新田中学校  
 日吉台中学校  
 大綱中学校  
 篠原中学校  
 樽町中学校  
 日吉台西中学校  
 新羽中学校  
 高田中学校  
 田奈中学校  
 中山中学校  
 十日市場中学校  
 鴨居中学校  
 霧が丘学園  
 東鴨居中学校  
 山内中学校  
 谷本中学校  
 青葉台中学校  
 みたけ台中学校  
 美しが丘中学校  
 すすき野中学校  
 奈良久良中学校  
 緑が丘中学校  
 もえぎ野中学校

〔都筑区〕

あざみ野中学校  
 鴨志田中学校  
 市ヶ尾中学校  
 あかね台中学校  
 都田中学校  
 中川中学校  
 川和中学校  
 茅ヶ崎中学校  
 荏田南中学校  
 中川西中学校  
 中山中学校  
 東山田中学校  
 早淵中学校  
 大正中学校  
 戸塚中学校  
 境木中学校  
 豊田中学校  
 汲田中学校  
 名瀬中学校  
 深谷中学校  
 秋葉中学校  
 本郷中学校  
 上郷中学校  
 桂台中学校

〔泉区〕

西本郷中学校  
 飯島中学校  
 岡津中学校  
 中和中学校  
 泉が丘中学校  
 上飯田中学校  
 いずみ野中学校  
 領家中学校  
 瀬谷中学校  
 南原中学校  
 東瀬谷中学校  
 下瀬谷中学校

〔瀬谷区〕

■その他

関東学院六浦中学校  
 慶應義塾普通部

〔青葉区〕

〔栄区〕

ご協力ありがとうございました。

● 応募状況 .....

推 移

年 度	平 成						令 和	
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度	3年度
応募校数	141	143	144	140	139	139	137	127
作 品 数	58,016	58,487	60,721	60,209	59,193	56,040	55,914	55,079

## ●第40回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会

### 〈第一次審査員〉

横浜市立中学校教育研究会国語科部会 25名

### 〈第二次審査員〉

横浜市教育委員会事務局指導主事 10名

### 〈最終審査員〉

横浜人権擁護委員協議会会長	小林	千恵子
横浜市人権擁護委員会第一ブロック委員	長島	由佳
横浜市人権擁護委員会第二ブロック委員	高橋	潤
横浜市人権擁護委員会第三ブロック委員	岩本	健治
児童文学作家	吉富	多美
横浜市PTA連絡協議会副会長	竹原	浩太郎
横浜市立中学校人権教育推進協議会会長	室伏	健治
横浜市人権教育研究会会長	梅田	比奈子
教育委員会事務局人権教育部長	前田	崇司
市民局人権担当理事	斉田	裕史

### ●協賛

横浜DeNAベイスターズ

横浜F・マリノス

ニッパツ横浜FCシーガルズ

横浜ビー・コルセアーズ

#### 横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市内における人権啓発活動を、関係機関の協力のもとに総合的かつ効果的に推進するために平成12年9月に設立。

構成：横浜市・横浜人権擁護委員協議会・

横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

## 第40回全国中学生人権作文コンテスト 横浜市大会作文集

令和3年11月

横浜市市民局人権課 TEL 045(671)2379

横浜市教育委員会事務局

人権教育・児童生徒課 TEL 045(671)3296

